



プロフィール

東京大学大学院社会学研究科博士課程を単位取得退学後、横浜市立大学商学部講師・助教授を経て、1992年に東北大学文学部助教授に就任。その後、シカゴ大学社会学部・コーネル大学社会学部客員研究員を経て、2002年に東北大学文学研究科教授に就任しました。教授就任後は、21世紀COEプログラム「社会階層と不平等研究教育拠点の形成」拠点リーダーとして、国際的研究教育拠点を形成するとともに、社会階層と不平等の融合的・複眼的研究を推進しました。2008年にはグローバルCOEプログラム「社会階層と不平等教育研究拠点の世界的展開」に採択され、格差問題を中心とした社会階層と不平等のより高度な研究を進めています。また、数理社会学会会長や国際社会学会理事、国際社会学会合理的選択理論部会長を歴任するなど、国際的視点から社会学の発展に貢献しています。

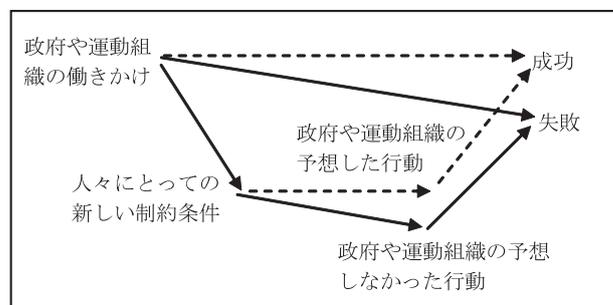
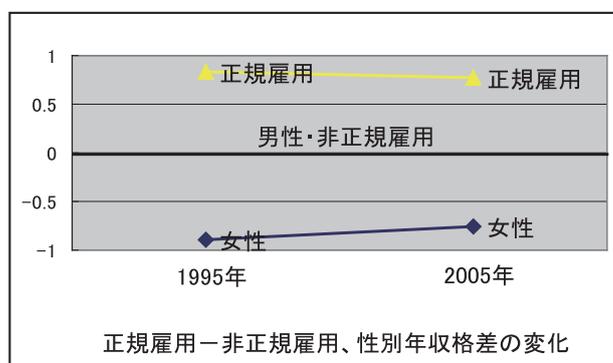
研究内容

◇社会階層と社会変動を研究

社会階層と社会変動という2つの研究テーマに取り組んできました。

社会階層研究では、マスコミ等によく取り上げられる格差問題、特に、正規雇用と非正規雇用の収入格差に注目しました。2005年に行った「社会階層と社会移動全国調査」データを用いて、年齢、性別、職業の影響を取り除いた分析をしたところ、正規雇用者は非正規雇用者の2.13倍の年収を得ていることが分かりました。ただし「格差は拡大しているか」というと、必ずしもそうとは言えません。右の上図は1995年と2005年の調査データを用いて、正規雇用－非正規雇用と性別が年収に及ぼす影響力の変化を見たものです。1995年から2005年にかけて0に近づけば、それだけ格差が小さくなっています。図から分かるように、雇用形態による格差も性別による格差も小さくなっています。

社会変動の研究では、社会計画や社会運動のように政府や運動組織が意図的に社会を変化させようとする「意図的社会変動」が成功したり失敗したりするメカニズムを解明してきました。その結果、政府や運動組織の働きかけに対して社会の人々の反応が複雑に相互作用して、政府や運動組織の意図とは異なる社会的結果が生じるために、意図的社会変動が失敗することが分かりました。右の下図がこのメカニズムを表わす概念図です。



メッセージ

◇開かれた心、柔軟な態度で、チャンスをものにしよう

私は、もともと社会学者はもとより学者になろうとは思っていませんでした。小中学校の頃はラジコン飛行機に夢中で、模型屋の主人になるのが夢でした。しかし、ラジコン飛行機を作るのに必要な計算をしているうちに数学の面白さに気づき、大学へ行って数学を勉強しようと思いました。

ところが大学に入ってみると周りは数学の天才のような人ばかりで、自分の才能では数学の研究をすることはできないと思いました。一方で、社会に対する関心があったので、数学を使って社会の研究をしてみようと考え、数理社会学や計量社会学といった分野を専攻するようになりました。また、私

はリーダーシップを発揮して集団の先頭に立つタイプではなかったのに、今では21世紀COEプログラムやグローバルCOEプログラムで拠点リーダーを務めています。

このように自分の経歴を振り返ると、自分の思いとは違った形で人生(キャリア)を歩んできました。若い人たちにお伝えしたいことは、このようなキャリアに対する柔軟な態度です。「初志貫徹」も良いですが、さまざまな機会に対して開かれた心を持っていると、その機会をつかんで次のステップに進むことができます。「自分はこういう人間なんだ」といつて縮こまらずに、大きなチャンスをつかんでください。